

(続) 歴史および歴史学について

天理大学人文学部教授

松原 浩一郎 Koichiro Matsubara

前回(本誌5月号)に引き続き、多くの学問領域に大きな衝撃を与えた「言語論的転回」が、歴史学に与えた影響について検討する。言語論的転回の特徴は、①「モノとそれをあらわす言葉の関係は恣意的だ」ということと、②「はじめに言葉が存在した。そののち、それに対応するモノが決められた」である。前回天理教教祖のひながたを、この考えにあてはめて、その親和性を検討した。

ところが、ここにも問題がある。「言語論的転回」では、モノとそれをあらわす言葉の関係は恣意的なのであるから、ひながたという言葉も、受けとめる側の間に差異が生じることになる。したがって、教祖のひながたに共通する解釈を規定することは難しい。だが、この差異こそが信仰の醍醐味ともいえる。教祖が発した言葉に、どんな意味があるかを考えること、それ自体が、信仰の思惟あるいは悟りなのだから、差異は当然ともいえる。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、教祖の言動が記述されているが、その解説はほぼない(教祖以外の人物が、自身の悟りや心情を述べているものは一部にある)。そこで、人は、自身の解釈の確証を得ようとする。そのため、教祖が発する声や放つ雰囲気や全身で受け止めたいと望む。次の文章がこの状況をよく表している。「逸話篇に出てくる『よう帰って来たな』『待ってた、待ってた』などの教祖のお言葉は、どんな声色で、どんな温度、速さだったのでしょか(藤江2024:34)。このように今を生きる信者は、教祖の声をイメージすることすら難しい。しかし、その声を直接耳にした者でも「高い声だった」とか「優しい口調だった」と言語化して記憶にとどめることがほとんどである。そして、自身が聴いた教祖の声を他人に伝える時「教祖は、高い声だった」と言ったとする。モノとしての実際の「声」と、それを「高い声」と表現した言葉の関係は恣意的なのである。

ただし、恣意的でもそのことが信仰に大きな影響を及ぼすことは少ない。教祖から直接声をかけられても、それが叶わなくても、信仰の思惟や悟りは自身の内面で行うのである。そのため、教祖の言葉をいかに受けとめるか、どのように解釈するかは、受けとめる者の悟りとなるので、そこに差異が生じ、それが信仰の深化の違いになる。教祖から直接声をかけられた者のほうが、それが叶わない現在の者よりも、信仰が深まると思いがちだが、そうとは限らないのである。さらに言うならば、解釈に正誤はなく、受けとめる側の悟りは恣意的になるのは避けられないとも言える。茶木谷(2019)はそのように指摘している。

さて、歴史学と言語論的転回に話題を戻す。とにかく、歴史学は何らかの応えを出す必要がある。この点について小田中(2022)は、おおよそ3つの対応が認められるという。

一つ目は「受容」である。言語論的転回をあらたな歴史学ツールとして利用しようという試みである。前回述べた労働者の「階級」についての論述(まず「労働者階級」という言葉ができて、この言葉が広がることで、労働者の集まり・実体としての労働者階級ができた)は、イギリスの労働史学者ガレス・ステッドマン・ジョーンズ(1942～)の所論である。ただし、受容したのは②のみであり、①は受容していない。

二つ目は「批判的考察」である。以前紹介した遅塚忠躬がこの論

考を先導した代表的人物である。遅塚(2010)は、①を肯定する。そして「真実(truth)」と「事実(fact)」を区別する。前者は「実際にあったことやモノ」後者は「歴史学者たちが妥当とみなしている手順に従って明らかにされた、現時点では実際にあったと考えてよいと大多数の歴史学者が考えていることやモノ」だという。そして、歴史学は、過去の「真実」ではなく「事実」を探求する学問領域だとして、言語論的転回を批判的に受け入れて両立を主張したのである。この所説は歴史学者の中でも広く受け入れられている。

三つ目は「無視」である。言語論的転回が歴史学の根本に関わることは理解しつつも、従来の歴史研究のパラダイムに沿った、つまり「それは実際いかなるものだったか」を明らかにする研究を淡々とすすめて、粛々と成果を発表し続ける態度である。言語論的転回はパラダイム転換を起こす程ではないと、無視するのである。このように3つの対応を通して、言語論的転回に一定の応えを出している。

さらに、言語論的転回にくわえて、歴史学に大きな影響をおよぼし、かつ福祉史研究にも関連する「ポストコロニアリズム」について言及したい。コロニアリズム(colonialism)とは、植民地主義と訳される。ある国家・集団が他地域を政治的・経済的・文化的に支配し、その支配を正当化する思想・制度・実践の総体を指す。そして、ポストコロニアリズム研究は、植民地支配が形式的に終わった後を分析対象とする。植民地支配が終わり、独立した後にも、当該国の社会・文化・知識・言語・経済の中に旧宗主国(植民地支配をしていた国)の影響が残る「植民地的な権力構造」を批判的に分析するところにポストコロニアリズム研究の特徴がある。この構造内の対立軸は「支配/被支配」「中心/周縁」「多数派/少数派」などである。さらに、植民地的な権力構造を、旧宗主国と植民地の関係だけのメカニズムとみなさない。たとえば、「多数派/少数派」という対立軸には「健常者/障害者」という構図も指定する。そうして、障害者による当事者運動、公民権運動やジェンダー史学などの構造分析にも適用されるのである。この構図を言語論的転回にあてはめてみたい。現在は差別的表現として言語自体の使用を控えている「白痴」「愚鈍」「精神薄弱者」などの言語が作られ、それに人々をあてはめて該当者を作り上げていった。そして、この範疇に入る人々に偏見の視線をあて、差別を助長してきた。優生思想により人を優劣に分類することも、この構造が社会に内在して、再生産してきた結果とみなす。このように、ポストコロニアリズム研究に向けられた視点は、社会に形成されてきた障害者への差別構造を明らかにする。

本稿の教内の福祉の歴史についても、基本的にはこの構図を意識して論じる。つまり、教内の福祉実践は、教内において少数派なのである。

今回は、社会福祉史と歴史学の関係を掘り下げてみたい。

[参考文献]

小田中直樹(2022)『歴史学のトリセツ』、ちくまプリマー新書。
遅塚忠躬(2010)『史学概論』、東京大学出版会。
茶木谷吉信(2019)『世界たすけに活かすおやさまご逸話』、養徳社。
藤江多喜子(2024)「教祖の温もりに少しでも近づきたい」『みちのとも』10月号、天理教道友社、34頁。